



鏡の欠片を 拾って

美作 藍

月の光に照らし出された私の手のひらは、紙のように白かった。指先だけが熱を持って、赤ちゃんみたいに赤く染まって。これがすべて真っ白になつた時、私は死ぬのだと思つた。息を吹きかけ、少しでも両手を温める。ああ、どうしてこんなに薄着で出てきてしまったんだろう。上着くらい羽織つてくれれば良かった。

町の人々は、みな眠つてしまつていた。私は街灯のない、静かな町の大通りを歩いていく。今にも雲に隠されてしまいそうな、弱々しい月の光だけが頼りだ。歩道は石造りで、きれいに整備されているようだつた。この暗い中を歩いても、つまづくことがない。時折、足の下で砂が音を立てた。ひとまず、今晚眠るための場所くらいは確保しなくちゃいけない。そう思つて歩いていくと、ほのかに明かりの灯つた宿屋を見つけた。店の前まで行って、看板を覗き込む。

(まだだめ、お金が足りないわ。)

私が持つているのは、たつたの二十五ダーハム。この宿屋で一晩泊まるのに、最低でも百二十ダーハムは必要だもの。今夜は、この近くで野宿することになるかもしれない。野宿なんて言葉を聞いたことがあるだけで、本当にやつたことは一度もなかつた。立ち並ぶ家の間にうずくまって、眠るくらいのことしかできない。

冷たい風が、服の裾から入ってきた。ぶるつと体を震わせ、

足の動きを少しだけ速める。こんな寒さで、一晩もつかしら。宿屋を離れて、住宅地の方へと歩き出した時だつた。道の向こう側で、闇が動いたような気がした。だれ、と心の中でつぶやく。まだ、この時間に起きている人がいるの? 人影は街路樹の陰に隠れて、すぐに消えてしまった。男か女かもわからない。気味が悪くなつて足を止めるど、近くで砂を踏む音が聞こえた。手足が硬直する。

「やあ、今晚は。君みたいな女の子が、こんな夜遅くに出歩いているのは感心しないね。」

男は私を見ると、流暢なラマニア語でこう言つた。人形のような白い肌。この辺りでは、あまり見かけない肌の色だ。一体、どこから来たのだろうか。年は、背格好からして二十代後半くらいに見える。頭の後ろで束ねられた長い髪は、銀に近い金色をしていて、青みがかつた月の光に輝いていた。

「珍しい色の、髪をしてるのね。」

私は、男の言葉をさらりと受け流した。男は、ああこれ、と言つて髪をなでる。そう、そんなに珍しい? 星を詰め込んだみたいな瞳が、すっと細くなつた。

「あなたは、旅人なの?」

私は、男の服に目をやる。白っぽくて柔らかそうな生地のタートルネックに、ゆつたりとした青色の上着。それと、ポケツトのたくさんついたズボン。肩からは、大きめのショルダーバ

ツグが下がっていた。私の質問に、男は「くりと頷く。

「そう、旅人だ。ついさっき、ここに着いたばかりだよ。」

それを聞いて、私は決心がついた。男が再度 口を開く。

「それで、君は——。」

「ねえ。」

私は、男の言葉をささぎつて言つた。男の顔を見上げて、相手の目をしつかりと見据える。

「私を雇ってくれない?」

ヒュウ、と風が鳴つた。数秒の間があつて、男の目が少しだけ大きくなる。

僕に、君を雇えって?」「そうよ。」「そうよ。」「私は自信満々に答える。すると男は、「それは無理な相談だね」と言って、私の横をすっと通り過ぎて行つてしまつた。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ!」「私は、慌てて男の上着の裾をつかむ。毛糸の柔らかな感触がして、服が少しだけ伸びたのがわかつた。男は、うつとうしそうに足を止める。

「放してくれないかな、伸びやすい生地なんだ。」「私は、あなたの役に立てる自信があるわ。」「申し訳ないけれど、僕には君みたいな子供を雇うお金はない。

他を当たつてくれ。」

まつたく相手にしようとしたい男に、私は早口でまくしたてた。

「私はナビーヴなの。治癒のできる者。聞いたことくらいあるでしょ?」

「ナビーヴだつて?」

男が、興味を持つたようにこちらを振り返つた。ナビーヴとは、ラマニア語で医師を意味する単語だ。私の国では、包帯を巻くなどの物理的な医療の他に、魔法に近い形の医療の開発が進んでいた。その治療法は、患者に手をかざすだけという、いたつてシンプルなもの。しかしその治療を行えるのは、ごく一部の限られた人間たちのみだつた。

旅には危険が伴う。大した怪我でなければ市販の薬で治りはするが、深い傷を負つた場合は致命的だ。その場の状況によつては、命を落とすこともある。それに最近は、なぜだかこの辺りでの医薬品の価格が高騰していた。魔法のように一瞬で怪我を治すことのできるナビーヴは、彼ら旅人にとって貴重には違ひなかつた。

(魔法、か。)

私は自虐的な笑みを浮かべる。きっとみんな、そう思つてゐるよね。あれは魔法だつて。物語に出てくる魔法使いみたいに、何の代償もなしに魔術が使えるつて勘違いしてゐる。手をかざす

だけで、怪我が治るつて信じてる。魔法なら、よかつたのにね。

ピシリ、と体のどこかで音がした。

「ど、とにかく、残りの話は中へ入つてから聞こう。もう寒くなってきたしね。」

そう言われて、自分の体が冷え切つてしまつてることに気が付いた。相手に言われるまま、先ほど通り過ぎた宿屋へと向かう。男の態度がガラリと変わつたので、私は口の端をくつと上げた。滑稽だわ。ナビーヴだけ、こんなにも扱いが違う。私がただの子供なら、話なんて聞いやくれないのよ。

男が、宿屋の入り口に立つた時だった。バーンと扉が開いて、小太りのおばさんが中から飛び出してきた。男が驚いて脇へ飛び退く。おばさんは私たちを見て、腹立たしげにため息をついた。ついさっきまで眠つていたのか、焦げ茶色の髪は乱れ、まぶたも半分くらい下がっている。

「お客様かい？ すまないね、急患なんだ。悪いけど、その辺りで待つてくれないかい。」

少し南部訛りのあるラマニア語だ。急いでしゃべつているせいもあって、かなり聞き取りにくい。

「急患？」

「ついさつき骨を折つたのさ。」

ぶつきらぼうな返答に、私は少しだけ苛立ちを覚えた。男は

気にしていないようで、のんきに相槌を打つている。それから私の方を向いて、意味ありげに目くばせした。「君がナビーヴなら、その人を治して『らんよ』」そう言つているような気がした。私は、今にも走り出しそうな勢いのおばさんを呼びとめた。

「その人を診せて。……私が、治すわ。」

足の骨を折つたのは、四十歳ほどの男性だつた。よほど痛むのだろう、額に脂汗を浮かべてゐる。彼の様子を見て、私は思わず足を止めた。後ろで見ていた男が、どうしたのと聞いてくる。おばさんは疑つて、おもむろに目つきで、私を見つめていた。大丈夫。これくらいの怪我なら、大したことないわ。私は軽く頭を振つて、自分の弱い考えを追い出した。

(しつかりしなさい。意氣地なしは嫌いよ。)

スウ、と息を吸い込んでから、患者に向かつて両手を広げる。私はその体勢のまま、静かに目を閉じた。



目を開くと、そこは見慣れた黒の世界だつた。私たち、ナビーヴだけが知つてゐる精神の世界。暗闇の向こうに、真っ黒な霧がうごめいているのが見える。なぜ黒い世界の中で、同じ色の霧が見えるのかはわからない。少しだけ、黒の密度が高いのかもしれないが、私は、すたすたと霧のいる方へと歩いてい

く。次の瞬間、黒い霧が私の体を音も立てずに取り囲んだ。息が詰まる。少しづつ、少しづつではあるけれども、霧が薄くなつていくのがわかつた。

病は気から、なんて言葉がある。実際のところ、あらゆる病気や怪我は本人の氣力で治すことができるのだ。人の氣力、つまりは精神力を、私たちナビーヴは自然治癒力と呼んでいる。それではなぜ、人は病気にかかるのか。それは、自然治癒力を下げる要因があるからだ。それは、その人が抱えている遺伝子的な問題だつたり、肥満などの後天的なものだつたり、いろいろな理由があるからだ。それは、その人が抱えている遺伝子だつたり、肥満などの後天的なものだつたり、いろいろな理由があるからだ。とにかく、たいていの人はその「枷」のために、もともと備わっているはずの自然治癒力を下げている。だから私たちは、その枷を外す役目を担っているのだ。外すといつても、鍵のようなものがあるわけじやない。自分たちの体に、一度その枷を取り込み、破壊するのだ。そうして、その人の自然治癒力を一瞬だけ元に戻す。それが、私たちナビーヴの力だつた。

それにしても、今回の霧は手ごわい。なぜだろうか。これくらいの骨折治療なら、何十回もやつてきたというのに。私は渾身の力を振り絞つて、霧をはねのけた。霧が消えたと思った瞬間、ガクリと足の力が抜けた。地面に膝をつく。そのまま、私は気を失ってしまった。